



宇宙教育研究所紀要創刊号の発刊にあたって

和歌山大学に宇宙教育研究所(IfES: Institute for Education on Space)が設置されて、まもなく2年になる。1年目は、はやぶさの地球帰還が開所に花を添えてくれたが、全体としては、大型外部資金の獲得、それに伴うスタッフの公募、口径12mの大型パラボラアンテナを始めとする教育研究設備の発注などに追われ、その年度の成果をまとめるチャンスを逸していた。2年目に入り、整備した設備の立ち上げも始まり、それらを用いてIfESの教員が開講する教養科目もスタートするなど、ようやくIfESの教育研究活動の一角が、宇宙教育と人材育成という混沌としたガスやチリの中から原始星として姿を現し始めた。ここに集まった論文や報告はまさに、そういった中で発せられた教育研究の産声であり、本紀要はそれらを記録したファーストライトである。

このファーストライトの観測に立ち会った観測者として、ここには2つの母天体が存在したことを報告しておく。

1990年代、和歌山県内には大型の公開天文台が2つも建設され、それに伴い全国からほぼ同世代の若いスタッフたちが引き寄せられてきた。それらは「わかてん(Wakayama Tenmon Consortium)」という勉強会を結成し、交流しながら進化を続けてきた。2005年には、本学の生涯学習教育研究センター(現:地域連携・生涯学習センター)内に「宇宙教育研究ネットワーク(NewEar)」という大学組織の枠を超えたネットワーク型の教育研究グループを結成し、科学の成果を市民にわかりやすく伝える「サイエンスコミュニケーション」の活動が始まった。

一方、本学システム工学部の開設時から取り組まれてきた学生の自主性・創造性を伸ばす教育システム「自主演習」は、2001年に全学組織である学生自主創造科学センター(愛称:クリエ)として発展した。その中で重点テーマとして宇宙教育が取り上げられ、学生が主体となったプロジェクトで電波望遠鏡やハイブリッドロケットの開発が行われるなど、プロジェクト型の教育手法を使った「まかせられる人材」の養成が進められてきた。

これらの2つの母天体は合体し、さらに若いスタッフを引き寄せ、ついに大型の研究予算を獲得できるまでの全国有数のグループに成長し、IfESの誕生へとつながっていった。一方の母天体はある意味「理科教育」をベースに誕生し、もう一方はどちらかというと「工学教育(ものづくり教育)」をベースにして誕生している。この2つの性格の異なる活動が合流してIfESが誕生したことを、観測者の責任として創刊号の巻頭言に記することで、読者の皆さんにIfESの誕生秘話の一部を知っていただくとともに、IfESの教員の皆さんには自らの進むべき未来の参考にしていただければと思う。

なお、今回の創刊号には、香川大学の能見公博先生から、同大学で開発された超小型衛星KUKAIについての貴重な論文を投稿していただいた。IfESも現在、超小型衛星の研究を始めたばかりであり、このタイミングでの寄稿は非常にありがたい。ここに感謝の意を表したい。

2012年春

和歌山大学学生自主創造科学センター
センター長 尾久土 正己